

大陸の花嫁

大陸の花嫁

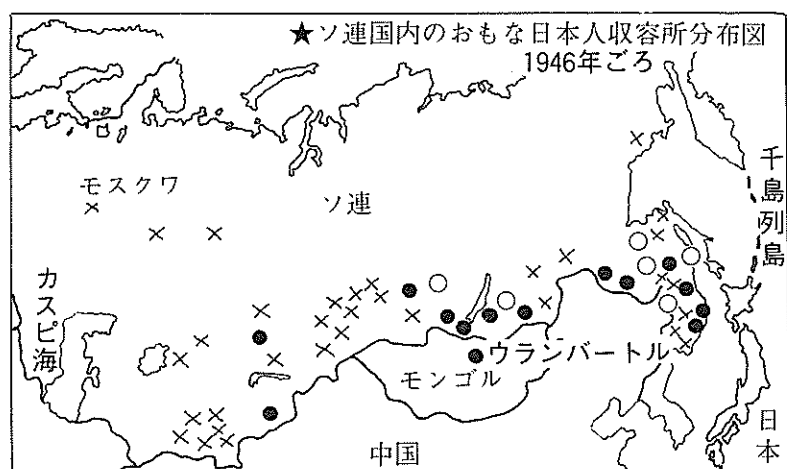
満州（中国の東北）移民が構想されたのは、日露戦争の後である。

満鉄創立委員となった参謀総長児玉源太郎が、「五千万の国民を満州に移入させることを得ば、露国屈強なりといえども、みだりにわれと戦端をひらくことを得ず、和戦緩急の制令は居然として、わが手中に落ちん。」と初代満鉄総裁後藤新平に向って説いたという。このように満州移民の目的の一側面に軍事的理念があることは否めない。

また、明治四十三年（一九一〇）外務大臣小村寿太郎は議会において、二十カ年百万人の移民を提唱した。しかし、昭和六年（一九三一）満州事変までに満州へ移住した二千三万人の日本人のうち、農業移民はわずか一千戸にも足りなかった。

満州事変後は、組織的な計画のもとに、昭和七年第一次移民からはじまる拓務省の集団移民をはじめとして、分村計画村、満蒙開拓青少年義勇軍、等々各種の農業移民が大量に送りこまれた。

そして、満州へ送りこまれた農業移民の出身地は、東北地方



とそれまで全国でも長野県の農家ほど裕福なところはない、とまで言われていた養蚕地帯が、世界恐慌のため一挙にして、日本一貧村へと転落した農民達が大部分をしめている。

とくに、昭和十一年（一九三六）の広田内閣の時、開拓民送出計画は二十年間一百万戸移住を呼ぼうとした。

ちなみに敗戦時の統計では、集団移民として満州に入植した数は、七九三団、約二十万人で民間農業移民、義勇軍、報国農場も入れると二十七万人に及んでいる。

そのうち、半数近くはソ連との国境地帯に、残りの半数は抗日連合軍のゲリラ地区の周辺におかれている。

この事をもても、移民に行つた人たちは「王道楽土」の建設の言葉を信じ、あるいは狭い日本の国土を抜け出て、広大な新天地で自立する夢をもって海を渡つたにせよ、実は国の政策であつた満蒙の治安

維持、対ソ国防の第一線に送り込まれていた事は事実である。

このことは喜多一雄の「満州開拓論」に三品参謀の演述の言葉として、次のように記されているのをみても明白である。

移民ニ対シテハ辺境地帯ノ防備ニツキ重大ナル価値ヲ期待シテイル、ソノ間接的価値トシテハ、戦時ニオイテ国境地帯ニ日本人ノ家ト人ガアルコトガ絶対必要デアリ、又、平時ニオイテ日本開拓村ハ辺境防備ノ日系軍警ノ重大ナル慰藉トナル。

ソノ直接価値トシテハ、国境地帯オヨビ同地帯軍事施設ノ防衛、交通路ノ確保、軍用食糧供給等ニ重大ナル意義ヲ持つ
(昭十四、三の講演)

そして移民した人たちは自身は、恐らく自分たちが移住したその土地が、盗んだのだといわれただけのわずかの金額で、むりやりに中国の農民から取り上げた土地であり、中国農民の怨のこもった土地であった事は夢にも知らなかったのではなからうか。

したがって移民たちはソ満国境に立てられた人柱のように、日本帝国の被害者であったと同時に、中国人にとっては加害者

の役割をさせられていた事も事実である。

敗戦の直前に、開拓団の青壮年男子にも召集令状がきた。続いてソ連軍の侵入、開拓団の逃避行、それも主人を召集でとられた後の女、子供達が異国の中で、西も東もわからない逃避行、その苦難は筆舌につくせないだろう。

千種からも、昭和十七年（一九四二）四月二十六日に満蒙開拓団の人たちが出発した。

じよらくちんに三十戸、庭田郷に五戸、計三十五戸。

チャムスより川蒸汽船で松花江を九時間上り舒楽鎮へついた。

五戸は奉天を経てコウパンスの庭田郷へついた。

この度、満蒙開拓団や青少年義勇軍に参加されていた人たちに、無理に手記をお願いし、後にできる予定の町史の中に入れておいていただくつもりだったが、急に町制二十周年記念として町史の一部を小冊子として発刊する事になったので、原稿メ間に間に合った、村上マサさんと藤村美千代さんの手記を載せることにした。

村上さんは村上謹氏、開拓団の花嫁として、

藤村さんは開拓団ではないが、満州守備隊の下士官として勤務されていた、藤村勝己氏の花嫁さんとして外地で、同じよう

に悲惨な体験をされた方々である。

(一)

村上 マサ

大東亜戦争最中、昭和十七年九月三十日大陸開拓団の花嫁として、大きな夢と希望を持って渡満したのです。

運河より溝帑子と營口線に乗り盤山県庭田郷開拓団に入植したのです。唯広々とした荒野に一部落二十六軒の集落が五ヶ所、そして住居といった屋根まで土の家です。水田は長方形の田が広々と続き、木といえば、よもぎ、そして大木といえば、楊の木が目印にありました。

私が部落に入植したときは、二十六軒の入植者も落伍者が出て二十軒程になっていました。

千種村からも西河内、鷹巣と四ヶ軒の人が入植していたそうです。その時は寺脇岸雄様だけが頑張っていたらしいです。

入植後は、水田仕事は部落一ヶ所にて協同作業で、食事も当番で作るのです。そんな事が二年程続きました。

入植してからの米作りは豊作でした。刈取った籾はそのまま出荷すると、白米にして一日三合の配給になって戻ってきます。

三年目より個人農業に変わっても働く者には、白米三合の配給で

は少なく、いつもお腹がすいておりました。地平線に沈む赤い大きな夕日を見る頃には内地が恋しく、郷愁のあまりに幾度か涙を流したことでしょう。そんな内にも長男一司が誕生し、水田も豊作が続くようになり、希望と生がいを持つようになつて来ました。

そんな喜びもつかの間、昭和二十年四月十三日に主人に現地召集令状が来たのです。主人は心配のあまりくちびるには熱の花ができて口もきけず、ただ、子供をたのむといって出征して行きました。

それは忘れられぬ悲しい日の一つです。今でも涙が出てきます。

戦争の勝利を信じ、子供の成長を祈り、一町の水田を作り一生けん命に働きました。稲作も大豊作で、九月中頃より刈取が出来るようになっていました。

部落一同の集合の連絡を受け、部落総代の家に集合し、その席で「終戦の詔勅」ラジオ放送を聞いた時には、皆々泣きに泣き眼を泣きはらし、三々五々家に帰って行きました。異国での敗戦はそれは大変にみじめで、今生きているのが不思議な位の毎日でございました。

私達の部落が一番初めに襲撃を受けたのは二十年九月十三日だと思えます。砲火の中を子供を背に本部に逃げ込みました。その時には産後三日目の婦人と二人の人が匪賊の槍で胸をささ

れ重傷を受けたのです。本部で冬を迎えた人達の中には体力の無い老人達が多く亡くなられたのです。

毎日が匪賊、八露軍の使役で、男手のある家は朝主人を送り出す時が別離と思つて送り出すのです。夕方帰つてくれば今日一日無事に生きのびる事が出来たことの喜びに変わり、そしてまた、身の置場の無い毎日が続いたのでございます。ことあれば隣保の方達と一緒に死ぬ事が出来るようにと願ひ祈るのみでした。

ある時は匪賊の襲撃に背においし子供の泣き声で、皆様にご迷惑をおかけしてはと思ひ、墓標と墓標の間にて一夜を明したこともありました。そして身を汚されるよりはと、頭髪を切り男装になり、身を守ることを考えて逃げのびていたのです。

そんな生活の中にも明るいニュースが伝わって来ました。引揚命令が出るかもしれぬと云う事でした。まだ帰つてこない主人を残して帰らなくてはと、そんな事にも心を痛めたのです。

待ちに待った引揚命令が来たのです。それは昭和二十一年五月二十二日です。庭田郷を出発したのです。汽車の乗り移りにも、背には二十五キロの荷物を負い前には子供を抱き、整列三時間程立ちんぼうしてから汽車に乗りました。茹蘆島より乗船したその時は大変嬉しうございました。でも本当に内地に帰れるのか、それとも外地につれて行かれるのではと思ひ不安でした。でも船は博多港に着いたのです。

おたいご結びをした可愛い娘さんの姿、遠くに見える日本の町並と山河、そして他県の知事さんのお出迎え、涙の握手、今までの辛苦の道のり、そして内地に帰つた喜びで涙のあるだけ泣きました。

博多に上陸したのは昭和二十一年六月二日でございます。今から三十四年前の出来事を思い出して書いてみました。いまだ外地から帰る事の出来ぬ人達の御健康をお祈りして筆を止めます。

(二)

藤村 美千代

昭和十九年五月、私は当時満州国興安北省ハイラル国境守備隊に、下士官として勤務していた夫のもとへ運命を託して、二十三才で單身嫁いで参りました。

いついかなることが起こるかも知れない軍人の身、覚悟はしていたものの敗戦のみじめさを、異国で味あうとは思ひもしなかつたことです。

内地は統制配給、物資不足で、老いも若きも「撃ちてし止まむ」の精神で戦況は厳しく、先の事など何一つわからない時代でした。

大陸に渡つた私は、広々としたホロンバイルの広原にある官

舎に落着いて、新家庭の一步を踏み出しました。

配給とはいえ物資も豊富で、不自由もなく、六月、七月と野生の草花が一面に咲き揃う大自然の果しない広野を、馬車に揺られた大陸ならではの嬉しい日もありました。

ハイラルは部隊が多く、家族も大勢来ており町には日本人の経営する商店もありました。部隊の方は、次々と南方へ移動していく隊もあり、演習、訓練と多忙で、平和なようで何となく無気味な嵐の前の静けさを感じる日々でした。

二十年八月一日、夫は三ヶ月の予定で遼陽の関東軍将校特別教育隊にいき、私は一人留守番でした。八月九日明け方、日ソ開戦と同時に、一里程先に見える将校会館に爆弾が落され、大きな音と共に開戦したのです。

もう戦場です。軍からの避難命令が出て、僅かな非常用の荷物を持って官舎を最後に、三里程ある兵器廠へけんめいに歩み避難しました。

子等も皆灼けつく砂の丘越えて、

夢中で歩みし

ソ連参戦日

ハイラルに住んでいた日本人は皆集合して、兵隊のみ残り夕こくの汽車で南下しました。途中機銃掃射を二回受けて、十一

日夜チチハルの小学校に着き、三日ほどいましたが、ここももう戦場のようで、武装した兵士や戦車などが沢山動いていて、ものものしく慌しい様相でした。

若き娘もならば別れの

杯受けて

戦場に向かうチチハルの駅

また南下命令でハルピンに着いた翌日、青天の霹靂とも言うべき敗戦となりました。

関東軍は一瞬にして崩れてしまい、生命すらわからない混乱の幾日かが続き難民となり抑留生活が始まりました。

ノモンハンの戦に賜いし

勲章を夫に詫びつつ

埋めし敗戦

八月十五日終戦と同時に方々から集って来る日本人と共にハルピン市内での集団生活が始まった。今までの平和な家庭生活から思いがけなく恐ろしい変った生活である。不安と不自由の中で、大人も子供もずいぶんの人が弱ってしまう。一寸先はどうなるのか、敗戦という味わった事のない不安と恐ろしさは一

層皆の心を暗くして、いざとなれば死をと覚悟していました。

ソ連兵が進駐して来るまでにと周囲の日本人達が運んでくれた食糧も相当あったのに、皆食欲もなく冷たいコンクリートの上にあり合せの物を敷いてゴロゴロしていました。

市中は日、満、ソ、鮮とさまざまな人種が混り合つて戦い、銃声は絶えまなく続き、十九日にソ連兵が入つて来て、先づ十五才以上の男子を並べて何処かへ連れ去りました。そして、女子供だけになり荷物を調べ凶器と目ぼしい物を取上げてしまふ。希望のない明日をも知れぬ暗い一ヶ月をここで過しました。

九月十一日、日本に帰すからと言つて、五里程離れた新香坊しんかぼうの少年開拓団跡へ運ばれて、若い者は農作業に従事しました。馬令薯ばいしよ掘り、大豆引き、その他広い広い畑は一筋をゆくのに自分の前の人からぬ位に長い畝うらで、農具もほとんどなく荒され持去られていました。

奥地から敗戦を知らずにいた人達が次々と避難して集つて来るし、一時は一万人余りになつて食糧は与えられず、ここは苦しいからどこへでも一人でも多く移動してくれ、何の力もどうする事も出来ないからと、日本人会から通達があり、土地の様子などわかっている元気な人達は、次々と集団で南下していききました。私は最後までこの集団にいたので、帰国は少し遅れましたが、無事に帰れたことを喜ぶと共に、あの時出ていった人達はどうかだろうかと、平和な今、当時をふりかえり思い

ます。

若きがゆえに我ながら元気で帰れたのだと思うとともに、満州の土になつた大勢の人々の冥福を祈る次第です。

次は詩にしたものと、短歌の道も知らないまま真実をならべたものです。

二十一年十月帰国した当時一年三ヶ月難民收容所での苦しかった生活を後の日の想出にと、忘れぬために当時の生活を詩にして順序にまとめたものです。

一、開戦避難と国境の

吾等に乗せた軍列車

落着く先も あらずして

漸おそく着いた ハルピンで

国敗れたる 報を聞く

二、露人、満人、敵の中

暴動略奪 恐れつつ

死なば 共にと 覚悟して

不安な明け暮れ寺の中

ああ、敗戦のみじめさよ

三、ソ軍の命にて運ばれる

此処新香坊の収容所

夢を抱きし少年の

元は開拓義勇隊

作りし人も 今は俘虜

四、何百町歩の収穫を

可弱い女の細腕で

僅かに残る農具持ち

朝露あびて星いだき

帰国まではと頑張った

五、粟、高粱の汁すすり

疲れし身体は ひとときの

油断もならぬ 今の身は

苦しい暮しに幼な児の

死にゆく数は増すばかり

六、帰国帰国と望みつつ

とうとう冬は やつてきた

着のみ 着ままの同胞は

発疹チブスの流行に

次々として倒れたり

七、昨日に変わるこの変化

われし人も今いづこ

明日の命は判らねど

強く正しく生きましよう

日本女性を乱さずに

八、細かい雪は降りしきる

穫りし野菜もあと僅か

ペチカもたけず ふるへつつ

かゆい身体もがまんして

話すは故郷のことばかり

九、非常非常の鐘がなる

この寒空の真夜中に

匪賊は吾等を襲うのか

僅かな糧を取りに来る

皆で守ろう生きるため

十、警備隊やら不寝番

夜も寝ず皆の協力で

食糧かくすことばかり
ここまで生きたこの体
今倒れてはなるものか

十一、長いひと冬去ったあと

青い草木の芽を摘んで

何でも食べる生きるため

野菜つくって働いて

春日はるびにあたって身をつくる

十二、市中の露軍が引揚げりや

マイマイニーヤが多くなる

金ない吾等を誘惑に

僅かな荷物も売りに食い

健康こそが大事なり

十三、嬉しい報らせはコロ島の

第一船が引揚げた

ニュースは伝うよろこびの

ああ ほんとうなら吾等にも

帰国の命いのちはきつとくる

十四、暑い太陽の照る下で

満人クリーに雇はれて

内地帰りの小遣いと

馴れぬ仕事も張切って

話は何時も帰国のみ

十五、夏の夜空に光る星

遠き故郷の両親いかが

強く吾等は生きてます

やがて会う日も来るでしょう

今夜も星見て警備です

十六、とうとう実る時が来て

胡瓜、大根、ポミーが

皆んなの力で上出来よ

夜のお菜にくばられて

元気づけようあと僅か

十七、待ちに待ったる命いのちは出て

九月四日の出発と

嬉しい知らせは皆の胸

唯この日のみ待ちつづけ

よくぞ苦難に耐えてきた

十八、一年有余の苦しみを

遠き外地で味わつて

共にすごした人々よ

この苦しみを忘れずに

祖国の土を踏みましよう

十九、ああ四千の犠牲者の

み魂も共にふる里へ

ボロのリユックに輝く瞳

満州国よさようなら

新香坊よさようなら

日本人ここに在りしと叫べども

北満おろしに祖国は途絶え

真赤なる夕日見つめつつ、吾れひとり

はるばる遠き祖国思ほゆ

いづくにか征きていまさむ君が身は

ただ健やかであれと祈らむ

四千の同胞寝むる難収の

寮舎の隅も月は照らしぬ

移動の日、死せし子背負い母親は

命のままにてトラックに乗る

死せし児を抱きて母は涙しつ

列にならびて、墓地に行く足

中国の土地なる故に掘起こす

むくろ折ろがみ涙こぼるる

脱穀の終へたるあとの大豆場に

雪かき分けて拾う幼な子

この寒夜着替すらなく病む人を

守りたまへと祖国の神に

この年は住める人なくあばら屋や

煉瓦とらんと、たつきのしろに

大陸の花嫁

一枚が十銭なりる煉瓦とり

おのも己もと子等もいでとる

日は落ちてあばら屋なりる難収へ

クリーに行きし友帰りくる

一日の作業終えれば友集い

又ふるさとの話花咲く

四千のああ犠牲者のこの墓塔

み魂帰れよふるさとの家

この春も咲きにけらしな迎春花

吾れ忘れ得ぬハイラルの地に

点々と佐世保の丘の灯の見えて

たどり着きたり祖国の土に